

Museum News



絵：柳田 基

2019 秋学期

展覧会

企画展

関西学院の130年
1889-2019

2019.9.28 (土) ▶ 12.14 (土)

※詳細は4ページをご覧ください

平常展

Go! Go! 大学博物館

特集陳列

ブチ再現・愛新覚羅家の人びと(展)

2020.1.6 (月) ▶ 3.21 (土)

2020 春学期

展覧会

企画展

渡辺禎雄の聖書の世界(仮題)

2020.4.1 (水) ▶ 6.13 (土)

博物館展示とフィールドワーク

博物館の展示品のあった場所

博物館で展示品をみていると、それが元あった場所や時間について考えてしまう。ときにはその場所に行ってみたりもする。

展示されている史資料はただ時間の順番に事実のままに並べられているのではない。企画をする者たちが展示の意図を決め、その意図に沿って遺されてきたたくさんの史資料のなかから、展示品を選択し、それらに関係づけ意図を体現しようと試みる。資料庫に置かれている史資料の群れは、それぞれの事実を伝えてくれる(もちろんその真偽についての検討は必要だ)。それらの中から展示の意図に沿って選ばれ、並べられる時に史資料には解釈が加えられる。その解釈が正しいかどうかは実はわからない。だから展示にはつねに内からも外からも検討が加えられ続けなければならない。

展示からの「語りかけ」とフィールドワーク

その上でのことだが、博物館の展示(とりわけ学院史の展示)にはこうした史資料そのものの真偽や解釈の妥当性、正当性の検討といった社会科学の真理追究とは別の、モノやモノとしての史資料の展示だからこそ醸し出される味わいが望まれる。その味わいをなんと表現していいかわからないけれど、それはそこからあふれ出てくる、生きられてきた歴史の喜びや悲しみや厳しさや温かみといったもろもろの感じだ。それを展示からの「語りかけ」とでもいってみようか。

では、その「語りかけ」をどのようにすれば引き出してくることができるのだろうか。私自身は近現代の村や町の人びとの暮らしについて研究しているが、その方法の中心をなすのがフィールドワークだ。現代の生活を知りたいときには現場に行つて(できれば住み込んで)、観察し、話を聞くことができるけれど、近世や近代の人びとの暮らしは書かれた文書や遺されたモノから再構成することが中心になる。その場合でも、文書やモノをそれがもともとあった文脈に仮想的に埋め戻してみるために、現場に向い、そこで生きた人びとの暮らしを再構成することを繰り返してきた。

ぎりぎりの人数と時間に追われているいまの大学博物館に、もちろんそんな余裕はないけれど、今回の「関西学院の130年」展では、130年史の起点となる原田の森や創始者・初代院長ランバ

スの暮らしした場所を訪れて、その「語りかけ」の端緒だけでも得たいと思った。展示される文書やモノだけで、それらが書かれ存在していた時、場所からのなにものかを感じさせることは難しい。それでも現場を訪れた者は、展示の向こうからの、生きられた歴史のひそやかな「語りかけ」を聞くことができるかも知れない。

*「KG JOURNAL」No.265は、「院長とたどる！ 関西学院130年の歴史」で原田の森やランバスの住んだ居留地などを特集しています。博物館の企画展「関西学院の130年」と併せて見ていただければ、もしかしたら展示からの「語りかけ」の声が聞こえてくるかもしれません。



関西学院を創立したW. R. ランバスの父J. W. ランバスは、1892年4月28日、神戸で亡くなり、小野浜墓地(旧生田川の川尻)に埋葬されました。



日本訪問中のW. R. ランバスは、1921年9月26日、横浜で亡くなりました。関西学院(原田の森)での葬儀の後、小野浜墓地に眠る父に別れを告げ、遺骨は中国に運ばれました。



神戸市街の北、修法ヶ原の一角にある神戸市立外国人墓地には、日本に関わりのあった世界60カ国の2,700人が眠っています。1952年の小野浜墓地移転・統合に伴い、J. W. ランバスの墓もここに移されました。同墓地は、2006年4月より、年に2度一般公開されています(申し込み制)。

(大学博物館副館長 古川彰)

展覧会報告 |

企画展

アンデスの布

—糸があやなすチャンカイ・レース—

本館が収蔵する古代アンデスコレクションのうち、チャンカイ文化期(10-14世紀)に製作された木綿糸によるレースを特集し、その巧みな技とユニークな文様に焦点を当てました。

2019.4.15 (月) ▶ 6.15 (土)

9:30 ~ 16:30

※日曜日、4月29日~5月4日休館

開館日数 48日

入館者数 2,100人



極細の木綿糸で織られた

チャンカイのレース

当館には、古く紀元前からインカ帝国の時代まで500点を超える古代アンデスの染織品が収蔵されています。今回の展覧会では、そのうちのチャンカイ文化において作られたレースを特集しました。

チャンカイ文化は、10~14世紀ごろに現在のペルーの中部海岸地域のチャンカイ川流域に栄えた文化です。この地域では灌漑が発達し、トウモロコシなどの農作物を生産するとともに綿花の栽培が盛んでした。現在でも、ペルーは良質のコットンの産地として知られていますが、その伝統は遙かブレ・インカの時代にまでさかのぼります。

その木綿糸を使って巧みに織りあげたのがチャンカイ・レースです。大きさは80cm四方のものが多く、主に女性の髪覆いとして使われました。木綿糸はもちろん手紡ぎですが、とても細い糸で、その紡績技術には驚かされます。この糸をタテ・ヨコに組織して織りあげ、文様をあらわします。文様を明瞭にするために刺繍を加える場合もありました。文様は神像やピユマのようなネコ科の動物、鳥や魚、波などです。ネコ科の動物や鳥は神の使者であり、魚や波はチャンカイで漁労が重要であったことをうかがわせます。

ガラスケースに入れられない

間近で見られる展示

今回の展覧会では、副題に「糸があやなすチャンカイ・レース」とあるように、糸使いの技の巧みさと、そこから生まれるユニークな文様に注目

しました。

そこでまずは、作品を直接ご覧いただけるように可能な限りガラスケースに入れずに展示しました。作品をケースに入れずに展示するのは、危険が伴います。古い時代の木綿糸ですから、不意に触れたりすると切れる場合があります。さらに、展示物に埃がかかったり、虫がつく恐れもあります。その危険性を考慮しながらも、間近にレースの糸使いをご覧いただける展示にして、写真も自由に撮影できるようにしました。



また文様は、はっきり見えるものもありますが、よく見えないものもありましたので、キャプションに文様をキャラクター化した図を添え、そのキャラクターに鑑賞のポイントを短いセリフでしゃべらせました。これは、当館で開催した過去2回のアンデス展の展示解説を受け継いだものです。

好評を博した

来館者の声

このような工夫はおおむね好評を得たようで、入館者からは以下のような投稿がありました。

「ゾクゾクするような文様を期待して行った身としては本当に大満足でした。無料だし、キャプションも楽しく書いてくれているので子ども連れの方にもおすすめ。楽しかった~! 写真だと文様もはっきり見えるんだけど、実際に目の前にあるとじっと見つめて角度を変えて少しずつ浮かぶ像もあり、それがまた楽しくて。巧みな技術で織られたレースは眺めているだけでうっとりしますよ。」

「圧巻のチャンカイレース尽くしでした。細く細く紡がれた木綿の糸で文様が織り出された精細なものから大らかなものまで、ほとんどは隔てるガラスもなく、間近で堪能できて写真もOKという有難い展示です。」

本展は、チャンカイ・レースだけを特集した初めての展覧会であり、興味をもって遠方からお越しいただいた方々もいらっしゃいました。ご来館いただき、また感想をお寄せいただきまして皆さまに感謝を申し上げます。

会期中の5月11日(土)には、当館の館長河上繁樹による「アンデス、あるんです。—閑学コレクションの染織品—」と題する講演が開催され、本館が収蔵するアンデス・コレクションの収集の経緯や、アンデスの染織史におけるチャンカイ・レースの位置づけなどについての話しがありました。

展覧会報告 II

平常展

Gift for the Future 関西学院のあゆみ 写真と絵でふりかえる時計台

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。

2019.6.24 (月) ▶ 9.14 (土)

9:30 ~ 16:30

※日曜日(但し8月4日は開館)、8月10 ~ 21日休館

開館日数 63日

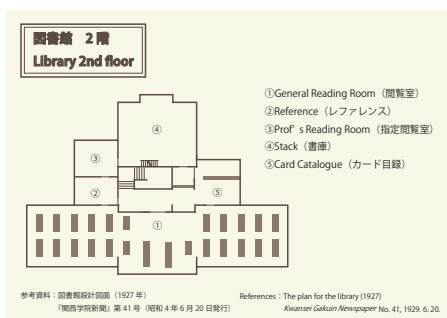


1929 (昭和4) 年、関西学院は創立の地である原田の森 (現在の王子動物園所在地) を去り、上ヶ原へやってきました。キャンパス移転90年という節目を迎えた今年、上ヶ原キャンパスのシンボルとして愛されてきた時計台を写真と絵でふりかえる展示を企画しました。

第1章・第2章

ヴォーリズ的设计図を通して

関西学院校舎設計者 W. M. ヴォーリズは1905 (明治38) 年、海外宣教を志ざして24歳で来日します。近江八幡のYMCA会館建設に携わったことをきっかけに、海外宣教に従事するため一度は諦めかけた建築家の夢を実現させることとなります。関西学院とヴォーリズの関係は、彼の来日直後にYMCAの会合が原田の森キャンパスで開かれたことから始まりました。その頃の学院はカナダ・メソジスト教会の経営参加や高等学部設置計画の中、本格的なキャンパス拡充に取り組んだ時期でした。ヴォーリズ的设计で、赤煉瓦の美しい校舎群が出来上がります。これらは市民にも親しまれました。そして上ヶ原キャンパス的设计も引き続きヴォーリズが手掛けまし



た。移転当時、時計台は図書館専用の独立建造物として建てられ、平面がT字型をしていたことが設計図よりわかります。1955年には図書館の拡大に応じて両翼が増築されるなど、増改築を繰り返して現在の姿に至りました。また上ヶ原キャンパス建設中の映像を流すことにより、当時を鮮明に想起させる展示にしました。今回は実物の時計の長針と短針も展示しました。普段周辺で見られない時計の針をご覧になり、来館された方々はどのように思われたでしょうか？



時計台の時計針 製作年不詳

第3章・第4章

さまざまな時計台の姿

前章ではヴォーリズ的设计図を中心に建築的観点から時計台を解説・展示したのに対して、ここでは絵画・写真による時計台を展示しました。学生・教職員・卒業生・近隣の方々から愛され、親しまれてきた時計台。緑豊かなキャンパスの中での佇まい、風物詩の桜並木や甲山を背後にしての風景など様々な作品がある中から油彩画8点、エッチング2点を選び展示しました。その中にはもちろん、本学の絵画部弦月会出身の画家たちの作品も含まれます。写真においては、時代の主な節目で外観や役目が変わってい



小林泰次郎《正門前から時計台を望む》1931年

く時計台を取り上げました。また2014~16年のクリスマスシーズンに学生たちが企画したプロジェクション・マッピングの映像を使い、現代の学生と時計台との関わりを鮮やかに紹介しました。いつの時代もキャンパスの中心であり続ける時計台として展覧会を締めくくりました。来館された卒業生より、「在学中の自由で楽しかった思い出がよみがえった」という声をいただきました。



プロジェクションマッピング 2015年



開催中の展覧会

関西学院の130年 1889-2019

2019年9月28日(土) ~ 12月14日(土)

※休館：日曜日、祝日(ただし10月14日(月)、11月3日(日)は開館)

今年、関西学院は創立130周年、上ヶ原移転90周年、そして博物館開館5周年を迎えます。この節目の年に、いまや8つのキャンパスを有する総合学園となった学院の歴史を創立から現在までの大きな流れとして紹介する企画展を開催します。

関西学院は、1889年9月28日にアメリカ・南メソヂスト監督教会の宣教師W. R. ランバスによって、伝道者の養成とキリスト教主義に基づく青少年教育を行うための男子校として創立されました。場所は、神戸の東郊原田の森で、現在の神戸市灘区、王子動物園のあるあたりです。夜になると追い剥ぎが出ると噂されるような森の中に1万坪の校地を用意し、わずか19人の学生・生徒を相手に授業を開始したといえます。創立時の学院は神学部と普通学部の2学部からなる小さな学校でした。学院は創立間もなく存続の危機に陥ります。それは1899年に公的教育機関に宗教教育を禁じる文部省訓令第12号が発表されたことに端を発するもので、キリスト教主義に基づく学院の普通学部は徴兵猶予と上級学校への進学資格の特典を有する公的教育機関の中学校を目指すことができなくなり、在学生の激減、学院存続の危機を経験しました。しかし同時に、東京での男子校経営を断念したカナダ・メソヂスト教会が学院経営に参画することになり、学院発展への足掛かりを得ることになります。創立当初、宣教師がつくった小さな学校だった学院は、教育面と施設面で徐々に整備され、学びの場として発展していきます。

また原田の森時代は、創立者ランバスの掲げた理念を受け継いだ教授陣によって、学院の精神的支柱がつけられた時代でもあります。C. J. L. ベーツが高等学部生に向けて提唱した“Mastery for Service”という言葉は、「神と隣人にと仕える」「自らの成長は隣人に仕える業をなすためのもので

ある」という学院教育の方向性を示しました。

学院が創立の地を離れて上ヶ原に移転したのは、1929年のことです。大学昇格に必要な資金の援助をアメリカ・カナダの連合教育委員会に求めることができず自力での資金調達を考えた結果でした。移転年度の学生数は1847人であり、上ヶ原の校地は7万余坪と広大なものでした。1932年に大学(予科)が開設され、さらなる発展の道を歩み始めた時、日本が戦時体制に突入します。太平洋戦争、大学紛争、阪神・淡路大震災と上ヶ原の歴史は幾重にも重なる挫折と再生の繰り返しでした。

この困難な時を乗り越えて今の学院があります。困難から立ち上がる時、そこには学生、同窓生の姿がありました。1995年の阪神・淡路大震災では学院関係者も犠牲となりましたが、そのなかでも学生による自主的なボランティア活動が展開されました。“Mastery for Service”の精神は、原田の森を離れた現在の学生にも受け継がれています。それは学院の歴史を理解する手がかりであるとともに、これからも学院の歩むべき道を示すものでもあります。

今回の展示では、学院に残る資料をもとに学院の創立前夜から現在までの紆余曲折した歴史を紹介いたします。



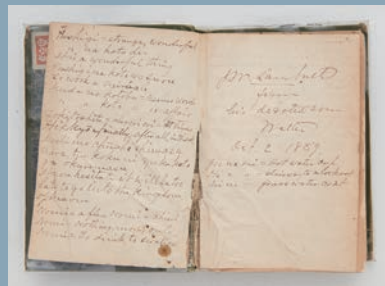
西宮上ヶ原キャンパス 1935年頃



自助会 1891-93年
学院創立間もない頃、学生には経済的に貧しい者が多かった。彼らは自助会を結成し郵便配達などのアルバイトをしたほか、自ら乳牛を飼育し、神戸市内で牛乳を販売した。得た収入は働きの大きさではなく必要に応じて分配された。



取り壊された時計台のエンブレム 1942年
敵国語の使用が憚られる風潮のもと1942年に時計台のエンブレムが取り壊された。破片の一部は商経学部の学生が鳥取の実家に持ち帰り、1989年にそのご遺族から学院に寄贈された。



『英和和英 袖珍字典』1888年
創立者ランバスが創立の年に父ジェームスに贈ったもの。ジェームスによる書き込みが多数あり、宣教師が学んだ日本語、文化について知ることができる。



関西学院大学博物館通信 第8号
KGU MUSEUM NEWS No.8

2019.11.1

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>